
彼女風味のむぎのんと朝を過ごしてみた

てんのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女風味のむぎのんと朝を過ごしてみた

【Nコード】

N1369P

【作者名】

てんのすけ

【あらすじ】

彼女風味のむぎのんをドリーム小説っぽく書いてみました。

(前書き)

よろしく願います。

「起きて。起きてよ、沈利さん」

沈利さんはいつもこんなふうにボクに朝は起こすように命令している。

優しく、でもしっかりと沈利さんが起きるように。

「ん……。なあに……？ 朝？」

いつもは品があってきりつとしている沈利さんだけど、朝は低血圧のせいか弱いらしく、寝ぼけ眼をこする姿はとても愛らしい。

そんな沈利さんの寝起き姿はギャップを強く感じるせいか、いつも見ても飽きない。

「なあに笑ってんのよあ？ 気味悪いわね」

どうやら表情に出ていたようだ。沈利さんがぼんやりとしながらもジト目でボクを見ている。

「いや、今日は、朝食がいい感じで出来たから……！ だから、自然と頬が緩んだのかも……」

自分でも苦しいなあと思う言い訳だったが、しかし沈利さんは満足したのか、はたまた眠いだけなのかそんな適当な言い訳で納得したようで、あくびをしながらベッドから降りた。

「それじゃあ、沈利さん。準備出来たら食卓まで来てください。もう、ご飯は用意できているので」

「はいはい。どうも、ありがとね」

ほにやほにやとしながら、洗面台に歩いていく沈利さん。

そんな様子を微笑ましくもボクは誇りのように思っていた。

ここ、学園都市では様々な技術開発の他に、超能力と呼ばれる能力の開発に力がそがれている。

そして、その能力の大きさによって学園都市内での階層が決まっていくなのだ。

ボクはレベル2という実に中途半端な位置にいるが、沈利さんは

違う。

レベル5。学園都市第4位『原子崩し（メルトダウン）』麦野沈利。学園都市内での沈利さんの立ち位置は遥か高みにあった。本来ならば、ボクなんか絶対に近づけるような存在ではない。それに、外を歩けば羨望や恐怖の視線にさらされることもざらだ。それでもボクは沈利さんの側にいることが出来て、なおかついつもはレベル5の気品に満ち溢れた沈利さんのほにゃほにゃとした可愛らしい姿を見ることが出来るのは本当に奇跡に近いことだと思う。だから、自然と頬も緩んじゃうし、嬉しくなるんだろうなあ。

身支度を整えた沈利さんは、テーブルに着くと明らかに嫌そうな顔をした。

そして開口一番にこんなことを言い出した。

「シヤケは？」

「ストックが切れちゃって……。ゴメンね。だから……」

「そんなのさ、外出てコンビニ行けばいいんじゃないのかにゃん？」

「だってそんなことしてたら遅刻するじゃないか……。時間だってギリギリだし……」

ズイツと一気に詰め寄ってくる沈利さん。力任せにボクの顎を引き寄せる。

「そんなこと言っちゃうのかにゃん？　ねえ、私、いうことをよく聞くアンタがお気に入りに入るんだけど？」

整い過ぎている顔がドアップされている。

顔が燃えるように赤くなっていることを感じる。

こんな風に迫られるのはほとんどいつものことなのにやっぱり慣れない。

「ち、遅刻して、落第して、これ以上学年離れたら、沈利さんのトコ、来にくくなるからっ！」

「……………」

ボクは押しのけるように沈利さんから距離をとる。しかし、沈利さんは何も言わずにボクの腕を掴み、強引に引き寄せた。

「なーに言ってるんの。ばあーか。冗談に決まってるでしょ。アンタの作るご飯、いっつも楽しみにしてるんだからなんだってイイに決まってるでしょ」

「へ？」

「でもさ、アンタのそういう照れた顔って凄く可愛いから。こうやって定期的に弄りたくなるのよ」

すっぽりと沈利さんの体に収まるボク。

「沈利さん……」

「ああ、でも朝食にシヤケがないことは由々しき事態よね？」

「へ……？ でも、なんだってイイってさっき……！」

「ああん？」

「なあ……っ！」

沈利さんの殺気のこもった視線に思わずひるんでしまうボク。

ボクなんかよりもレベルの高い人間でもビビってしまうのではないだろうか？

「だから、今日、アンタ午前で授業終わりなんでしょ……？ 朝食の不手際の詫びをしなさい。お昼、どっか行くわよ」

「え？ だって今日、沈利さん午後から用事があるって……」

「暇つぶしにいられた用事だからどうでもいいのよ！ いいから、アンタは！」

先ほどのまでの勢いは消えて実にか細い声で沈利さんは言った。

「私と一緒にいればいいのよ……」

すぐにまた思いつき抱きしめられたボク。

こういう時は決まって沈利さんがボクに見られたくない顔をしている時だ。

だからボクもそれを抱きしめることで応える。

「はい、一緒です。沈利さん」

（後書き）

感想、ご指摘を頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1369p/>

彼女風味のむぎのんと朝を過ごしてみた

2010年11月25日22時48分発行